

発達初期の理解語彙の獲得 ()

家庭訪問調査 (1) -

発達科学研究教育センター 阿部五月
発達科学研究教育センター 藤永 保
発達科学研究教育センター 田中規子

Understanding of Language in Early Development ()

- Research by Visiting Home (1) -

Center of developmental education and research ABE, Satsuki
Center of developmental education and research FUJINAGA, Tamotsu
Center of developmental education and research TANAKA, Noriko

乳幼児はどのようにしてことばを獲得していくのだろうか。本研究では、ことばの産出より早い段階で始まるその理解の過程、特に何が言語理解の手掛かりになり易いかを明らかにすることを目的とし、クーイングや喃語などの前言語的音声や、情動表出や身振りなどの非言語的側面と言語理解や産出との関係を検討する。

4人の0才児を対象として、約2年間にわたり個別に家庭訪問調査を行う予定であるが、本稿では初回の調査結果の報告をする。4人の被験児は調査開始時点で週齢11週から34週であり、ごく平均的な環境で育っている。1名は早産で生まれたものの、総じて健康状態も良く順調に発育しているようである。また4人ともまだ発語は無く、クーイングと喃語の段階である。以降の詳細な調査結果は第2稿で報告する。

【キーワード】理解語彙, 前言語的音声, 身振り, 家庭訪問調査

How do babies acquire language? The main purpose of this study is to clarify the process of understanding language which begins before word production, especially what is liable to be a cue of understanding language. Relationship between pre-linguistic vocalization such as cooing and babbling, non-verbal aspects such as expression of emotion and gestures and understanding and production of language are investigated.

We are planning to conduct research by visiting the homes of 4 individual subjects, once a month for about 2 years. In this paper, the results of the first set of research are detailed. The 4 subjects were all between 11 and 34 weeks of age when the research began and they are growing up in a normal and average environment. Though one of them was born prematurely, they are all in good health and developing normally. They don't speak any words yet, only coo and babble

at this point. The results of following research are reported in study 2.

【 Key Words 】 Understanding words, Pre-linguistic vocalization, Gestures, Home visiting research method

序 文

赤ちゃんは生後2ヶ月頃からクーイングと呼ばれる声を出し始め、6ヶ月以降になって喃語と呼ばれる声を発するようになる。1才頃になって、マンマ、ワンワンなどいわゆる「ことば」を発するようになる前に、実は様々な発声を積重ねているわけである。本研究ではそうした前言語的音声や他者とのコミュニケーションに注目することにより、発話以前の言語理解がどのように進み、発話につながっていくのかを明らかにすることを目的とする。また、発話以前の言語理解の過程が明らかになることによって、乳幼児を対象とした言語発達検査の作成ができれば、言語発達遅滞児の早期発見と早期療育の開始につながるとも考えられる。今回の調査方法は、質問紙調査と訪問による個別調査の2通りとし、質問紙調査では障害児を含む乳幼児の前言語的音声や言語理解、発話に関する量的データの分析を行い(田中他, 2001)、2つの研究方式が相互に補い合ってより明確な結果が得られることを期待している。

問題と目的

ことばを発し、それを通じて高次なコミュニケーションを行うのは人間特有の行為であり、そのことがヒトと他の種を分ける最も大きな要素のうちの一つであることは言うまでもない。人間の赤ちゃんなら放っておいてもそのうちに母国語のことばを発し、特別な訓練をしなくてもスムーズにしゃべれるようになるのは当然のことと思われがちである。実際、個人差はあるものの、2ヶ月頃から「アー」とか「クー」とか聞こえる柔らかな声(クーイング)を出し、6ヶ月頃からは「パパパ」、「ダダ」などという少し高次の発声(喃語)を、そして1才前後には身近で簡単な単語を発し始める。そして数年間で母語の基本的要素を、さらに就学前には主な文法規則(統辞法)や意味的側面を習得するといった過程は多くの言語に共通であるという知見が見い出されている。

これらは果して本当に放っておいても身につく自然発生的なものであろうか。チンパンジーを家庭で育てたヘイズ夫妻(1953)は、初期には自発的発声があったが、やがてそれらは消失し、喃語の段階に進むことはなかったと報告している。喃語は、やはり人間特有の現象であり、軽視してよいものではない。また、ひとたび言語障害や言語遅滞などの事例に出くわした時、これらには深い意味があることに初めて気づき、生まれた時は何も解しないように見える赤ちゃんがいかにしてことばを獲得し、複雑なレベルにまで到達するのかということに改めて興味を持たざるを得ない。

乳幼児がどのようにしてことばを獲得していくのかという問題には古くから人々が関心を持ち、多くの研究者たちが取り組んできた。古代エジプトでは、乳児にことばかけをせずに必要な養育のみを与え、最初に話す言語を調べるといった実証的研究が行われた。20世紀においては、行動主義者たち

は言語獲得も他の能力の発達と同様に学習理論で説明しようとし、環境を重視する立場をとった。一方、生得論者たちは言語の獲得過程は諸言語や文化を通じて普遍であること、また学習理論のみでは説明できないことなどから、人間は言語を獲得するための特別な能力を持って生まれてくる、そして環境からの入力の内熟的成熟を助ける手がかりにすぎないと主張した。相互作用論者はこれら2つの理論の中間的立場をとる。言語獲得の特殊性を認めつつも環境からの入力も重視する立場である。以降、大まかには「生得性」か「環境因子」かという議論が繰り返されてきた。この間、養育放棄や遺棄された子どもの事例の研究などにより、言語獲得の可塑性や臨界期の問題も議論された。また、大脳生理学、神経解剖学などの分野の発展により、言語と脳の関係も徐々に解明されてきている。子どもに対する大人の発話や働きかけの研究も進み、子どもはそこからどのようにことばの規則性を見つけ出していくのか、大人はどのような役割を果たすのかなどが問題とされた。

さらに初期の言語獲得に関する研究も数多く行われてきているが、特に乳幼児の母国語の獲得過程は大人が第二外国語を習得する過程とは大きく異なり、独自の研究を必要とすることが明らかになった。発達に伴う発声器官の形態的变化と呼気の調節や発音の練習により次第に言語音の発声が可能になるが、それらとともに、ある特定音が特定の意味を持つことが理解されなければならない。さらにそれぞれの語が具体的な事物を指し示すのみでなく抽象的なカテゴリーを表わすという、言語の基本的な要素を初期の段階ですでに含んでいるからである。

初期の発声に関しては、乳児は喃語や笑い声でさえも、大人の模倣をし練習を繰り返すことにより、発声を可能にしていくこと、そしてその際に手足の運動を伴うことなどが明らかにされてきている（正高，2001）。また、初期の発話に関する研究も行われており、語彙の分類や出現時期、消失などが調べられている。桐谷ら（1999）は、「慣用操作」（物の特徴や機能に合った使い方をする動作）や「慣用操作」の言語表現（ボールに対して「ポーン」など）が物の名前の獲得において重要な役割を果たしていると指摘する。

秦野（2001）は、子どもは生後10ヶ月くらいから、大人の発話の意味をある程度理解している行動を示すようになり、初期の語においては産出より3ヶ月から6ヶ月ほど理解が先行するとしている。発声には、器官の発達や微妙な調音が必要であるが、理解の方は状況や発話者の表情、声のイントネーションなどを手がかりとすることができるからである。

しかしながら、語の理解が音声を主とするさまざまな要素のうちの何を手がかりとしているのか、またいつ、どのように進んでいくのかなどに関しては、よく分かっていないのが現状である。

本研究は、発達初期において、発話以前の言語理解がどのように進み、発話につながっていくのかを明らかにすることを目的とする。誕生直後は反射的に見せることの多い笑顔も一定の調子の泣き声も、数ヶ月経つといくつかのパターンを持つようになってくる。このように分化した笑い声や泣き声は、感情や要求などを示す音声的信号の第一歩である。また指差しや身振りなどの非音声的行動も、意志や応答などを表わすコミュニケーション手段の一つである。これらの動作や行動は、特定の親密な養育者との情動的相互交渉の中で現れるものであり、その出現には共感や情報の伝達、共有の欲求が育つことが必要であろうと考えられる。

このような共感や欲求などの情動的側面の発達過程や泣き声、笑い声を含めた発声の変化を追って

いくことにより、乳幼児の言語理解の過程を解明する。またその間の非音声的行動についても検討し、どのように発話へ発展していくかも調べる。

方 法

1. 調査対象

2001年9月の調査開始時点（Kのみ2001年8月）で、首都圏に住む、まだ発語の無い健常な0才児4名を対象とした。4名の性別と生年月日は以下のとおりである。

N；女児，2001年6月15日生まれ

K；男児，2001年5月18日生まれ

S；男児，2001年4月11日生まれ

A；男児，2001年1月13日生まれ

2. 調査方法

調査員が4名の被験児宅をそれぞれ毎月1回ずつ訪問し、母親による調査用紙への記入、調査員による調査用紙への記入、録音、録画の4つの方法による記録を取った。具体的な方法と内容は以下のとおりである。

母親による調査用紙への記入

1週間に1度、その週の被験児の様子を<母親用記録用紙>（資料1）に記入してもらう。主な内容は、

- ・発声や発語、笑い方に関すること
- ・歌やビデオ、テレビに対する興味及び反応
- ・言語理解について
- ・子供の変化、その他

である。

調査員による調査用紙への記入

家庭訪問の際、毎回発達を記録する<チェックリスト>（資料2）、初回の訪問の際に記入する<基本調査>（資料3）及び毎月1回の訪問の際に記入する<調査員用記録用紙>（資料4）の3種類がある。内容は以下のとおりである。

<チェックリスト>

- ・「首がすわる」や「ハイハイ」、「歩き始め」などの身体的発達
- ・「ハンドリガード」や「指差し」などの身体の細かな動きの発達
- ・「簡単な用事」や「家族の持ち物の区別」などの知的発達

<基本調査>

- ・家族について（家族構成、家族の話すことばや被験児との接し方など）
- ・生育環境について（住居の状況、育児方針など）

- ・父親の育児参加について

< 調査員用記録用紙 >

- ・育児の方針，スケジュールや習い事
- ・泣き方，笑い方の分化及び変化
- ・身体の動きの変化
- ・音や声，物への反応
- ・アイコンタクトについて
- ・調査時間内の子どもの発声
- ・なじみのある単語への反応
- ・子どもの変化など
- ・その他随時簡単な観察，たとえば家族の名前を呼んだ時の被験児の反応など

録音

あらかじめ被験児の母親にテープレコーダー及びテープを渡しておき，被験児の発声や親子のやり取りを，1ヶ月に合計1時間程度，録音してもらう。

録画

毎月の訪問の際に，被験児の動きや表情，発声や母子のコミュニケーションの様子，音や声，物への反応などをビデオカメラで録画する。

結果と考察

調査は2001年9月（Kのみ2001年8月）に開始し，各々の被験児が二語文を話せるようになる程度まで，およそ2年間継続して行う予定である。ここでは被験児ごとに，初回調査の結果を報告することとする。

1. 被験児の環境的要因

まず，4人の被験児の環境的な要因を見してみる。表1は<基本調査>の項目を中心に，出生時や出生後の環境的要因を被験児ごとにまとめたものである。

4人とも核家族であるが，N，S，Aは第2子であり，Kのみ第1子である。中でもSとAは少し年令の離れた二人兄弟の二番目で，家族構成は非常に似ている。

父親の育児参加については，Aのみ「あまりしない」であるが，他の3人の父親は家にいる時はかなり積極的に協力しているようである。これは現代の父親の傾向を表わしているのではないだろうか。

育児のスケジュールに関しては，月齢の高いSとAは，小学生の兄がいることもあり，同じような規則正しい生活をしている。初回調査時点で生後週数の同じNとKでは，Kは約1ヶ月の早産であり，またNは姉の保育園への送り迎えに毎日決まった時間に連れて行かれるためか，Nの方が生活のリズムができているようである。

表1. 被験児の環境的要因

	N: 女児 生後11週(2ヶ月)	K: 男児 生後11週(2ヶ月)	S: 男児 生後22週(5ヶ月)	A: 男児 生後34週(7ヶ月)
出生時	妊娠38週に正常分娩, 2864gで生まれる。 母乳のみ。	妊娠36週の早産, 仮死状態, 1840gで生まれる。 約3週間, 保育器で過ごす。 母乳とミルクの混合栄養。	妊娠39週に正常分娩, 2686gで生まれる。 母乳とミルクの混合栄養。	妊娠37週に帝王切開, 2962gで生まれる。 母乳とミルクの混合栄養。
家族	父(40才), 母(36才), 姉(4才)の4人家族。家族は標準語を話す。平日の昼間は主に母親と自宅で過ごし, 夕方, 姉が保育園から帰ってくる。父は不規則勤務。	父(39才), 母(33才)の3人家族。両親は標準語を話す。平日の昼間は母親と自宅で過ごし, 1ヶ月に一度程度, 祖母のいずれかが2~3日泊りがけで面倒を見に来てくれる。	父(36才), 母(33才), 兄(6才)の4人家族。両親は標準語を話す。平日の昼間は母親と自宅で過ごし, 1~2週間に一度は, 近所の祖母宅で過ごす。また, ときどき祖母が夕方家に来て, しばらく相手をしてくれる。	父(38才), 母(32才), 兄(7才)の4人家族。平日の昼間は母親と自宅で過ごす。
生育環境	都内の集合住宅の6階に住む。間取りは3LDK(和室が1室)で, 専用の庭は無い。和室以外はフローリングで, 姉のおもちゃがたくさんある。	郊外の集合住宅の1階に住む。間取りは3LDK(和室が1部屋)で, 専用の庭は無い。和室以外の床はコルクで, 初めての子どもなので, 家の中はまだ大人仕様。	一戸建て(2階)で, 延べ床面積は約30坪。庭は無い。すぐ裏に土手があり, リビングの窓越しに往来する人や橋を渡る車やバスが見える。リビングと和室が続いており, 這い回りやすい。	一戸建て(2階)で, 延べ床面積は約30坪。あまり物を置いていない。
育児の方針	人の迷惑にならないよう, 明るく, 健康に。	小さく生まれたので, 健康に育てたいと願っている。	健康でのびのびと。基本的な生活習慣をしっかり身につける。また, 善悪の判断のできる子に。	人の痛みが分かるようになって欲しい。特にあいさつを心掛けている。
父親の育児参加	とても協力的。不規則な勤務形態だが, 家にいる時間は普通の父親より長く, 食事を作ったりすることもある。	平日は夜のみ。休日は半分くらい外出しているが, 家にいる時は主体的にしている。夜帰って来ると, ずっと抱っこしてしてくれる。授乳(母乳)以外は何でもできる。	朝仕事に出かける前に遊んだり, 早く帰宅した時はお風呂に入れたりする。家にいる時は積極的に相手をする。	今はあまりしない。

発達初期の理解語彙の獲得（ ）

	N：女兒	K：男児	S：男児	A：男児
育児のスケジュール	6～7時頃起床。3～4時間おきの授乳。母が姉を保育園に送り迎えするのに連れて行く。21時頃寝て、3～4時頃授乳。	3時間おきの授乳。まだ昼夜が完全ではなく、夜中起きている時もある。	6時起床で母乳。昼寝を午前と午後と1回ずつ。3～4時間おきに授乳。離乳食は今週から朝1回。21時就寝で、夜中は1～2回授乳。だいたい安定している。	6時起床。昼寝を午前と午後と1回ずつ。離乳食は朝と夕方の2回。21時就寝と規則正しい。
親の言語刺激の与え方	母親はかなり積極的に声をかけている。歌を歌ったり、歌いながら子どもの身体を動かしたりすることも多い。調子は明るい。	子どもが声を出したり動いたりした時および何か働きかけをする時（オムツを替えるなど）などには必ず声をかける。静かにしていても語りかけることもある。両親とも口調は非常に優しい。	子どもが声を出したり動いたりした時には声をかける。静かにしていても語りかけることもある。母親が歌をよく知っていて、歌ってあげることも多い。	母親は子どもが静かにしていても、積極的に話しかけている。

親の言語刺激の与え方は、母親が主であるが、4人ともかなり積極的に働きかけていることがわかる。1960年代にアメリカのコーディル（1969）が行なった母子関係の日米比較では、日本の母親はおとなしい子どもを理想像としているためか、母親も子どもに対し積極的に働きかけをするというよりは、むしろ子どもが動いたり声を出したりした時に応答的に声掛けをするという結果が得られている。この調査は対象が日本の特定の地域に限られたものであり、また今回は4人の母親のみの結果ではあるが、40年を経た現在では、価値観の変遷に伴い、日本の母親の育児の姿勢も変化してきているのかもしれない。

次に、初回調査の時点での各々の被験児の発達の状況を、発声や音声への反応を中心に見てみる。

表2は<チェックリスト>、<調査員用記録用紙>及び<母親用記録用紙>の初回調査分を被験児別に、項目ごとにまとめたものである。なお、発達の評価に関しては『改訂版日本版デンバー式発達スクリーニング検査』を参照した。

2. Nについて

まず身体的発達であるが、10週くらいで首がすわり、足の動きも力強く、週数に比してしっかりしている印象を受けた。

泣き声は母親にもまだ聞き分けられないようだが、音量は大きい。

笑い方に関しては、以前は反射的だったのが、人の顔を見て笑うようになり、「ハハハ」、「キャキャ」などという声を伴うこともある。

発声に関しては、まだクーイングの段階だが、時折「アーエー」というような、母音のみであるが2音節の発声（「過渡期の喃語」）も見られる。また、母親が話しかけると、応答するように「ウー」

などという声を出す。これは“vocal play”と呼ばれ、生後3ヶ月くらいから見られるものである。

表2. 各被験児の発達状況

	N: 女児 生後11週(2ヶ月)	K: 男児 生後11週(2ヶ月)	S: 男児 生後22週(5ヶ月)	A: 男児 生後34週(7ヶ月)
身体の発達 や身体の動き	首がすわった。 足の力が強くなり、 寝ていて上の方に動 いてしまうようにな った。	まだ首はすわらな い。 手足をよく動かすよ うになった。	寝ている状態から腹 筋を使って起きあが ろうとするようにな った。 母親の方に向かって、 ずり這いのような動 きをする。四つんば いの姿勢もできるよ うになったので、も う少しでハイハイが できそう。	支えなしでお座りで できるようになった。 歯は4本はえている。 。
泣き声, 泣き 方	まだあまり分化して いない。(聞き分け られない)	空腹の時は激しく泣 く。オムツの汚れで は泣かない。	空腹時, かまって欲 しい時, 姿勢を変え たい時(うつ伏せな どで苦しい時), うん ちをした時, 大きい 音でびっくりした時 など, 泣き方で分か る。	眠い時は「フニャフ ニャ」, 空腹の時は大 声で「ギャー」, 怖い 時は激しく「ヒック ヒック」と泣く。
笑い声, 笑い 方	人の顔を見て笑うよ うになった(以前は 反射的に、宙を見て 笑っていた)。笑顔 だけの時もあるが、 「ハハハ」「キャキ ャ」などと声を出し て笑うこともある。	声を出さないで笑顔 だけの時もあるが、 突然、「ハハハ」と笑 うこともある。	よく笑うようになって きた。目が合うと、誰 にでも微笑む。 話しかけられた時や くすぐったい時には 「キャッキャッ」と 笑う。	家族があやすと声を出 して笑う。(5ヶ月 くらいから「キャ ハハハ」とよく笑 うようになった。)そ れ以外は笑顔だけ。 夜寝ている時に「ヒ ッヒッヒ」と笑う時 がある。
子どもの発 声	「アー」「ウー」「エ ー」など1音節のも の及び「アエー」な ど2音節だが、単純 母音からなるもの。	「クー」「アー」など 1音節のもの及び 「アウー」「エーエ ー」など2音節だが、 単純母音からなるも の。	「アー」「ウー」「ン ー」など1音節のも の、「アーアー」「ウ ーウー」「エーエー」 など2音節だが、単 純母音からなるも の。	「アー」「ウー」「マ ー」など1音節のも の、「アーアー」「ア ーウー」など2音節 だが、単純母音から なるもの及び、「ママ マ」など子音+母音 の複数音節からなる もの。 息を吐きながら唇を 震わせて「ブー」と いう音を出し、つば を飛ばす。

発達初期の理解語彙の獲得（ ）

	N：女兒	K：男児	S：男児	A：男児
音や声への反応	視野内で手をたたいたり、ガラガラ（おもちゃ）の音をさせたりすると、顔を向ける。後方からの音には反応しない。視野内で母親の声が聞こえると、目を合わせ、「ウー」と声を出し、表情が和らぐ。後方からでは反応しない。調査員の声に対しては位置に関わらず反応しない。	手をたたく音やガラガラの音、母親の音のいずれにもあまり特別な反応は示さない。	視野内で手をたたいたり、ガラガラの音をさせたりすると、喜び、近づきたい様子。後方からの手をたたく音には反応しない。ガラガラに対しては、身体を後ろに向けようとするが向けない。視野内では、母親の声にでも調査員の声にでも顔を向ける。後方からでは母親の声に対しては「ンー」と言う。調査員の声に対しては、後ろを向こうとするが向けない。（起きている時はほとんどうつ伏せなので。）	視野内で手をたたくとにっこり笑う。ガラガラ（おもちゃ）は手を伸ばしてつかもうとする（実際にはつかまない）。後方からの音に対しては振り向く。視野内の母親の声に対しては「うん」と言い、後方からでは振り向かず「うん」と言う。調査員の呼びかけに対しては、視野内では目を合わせ、後方からでは振り向く。
歌やテレビ、ビデオへの反応	母親が「ぞうさん」を歌うと笑う。番組に関わらず、テレビをじーっと見ていることがある。	ベッドメリーの音楽（ゆりかごの歌）と回転するおもちゃに反応して、手足をバタバタさせる。テレビ、ビデオにはまだ反応しない。	仰向けに寝かせ、母親が顔を覗き込んで、赤ちゃん体操などをしながら「きしゃぼっぽ」「しょじょじのためきばやし」「ぞうさん」などを歌ってあげると、手足をバタバタさせて喜ぶ。	母親が歌を歌うと、目をじーっと見つめ、静かに笑う。兄が歌うと、手足をバタバタさせて「ウーウー」とずっと言っている。女性が笑っているテレビコマーシャルを見て、ニヤーと笑う。
話しかけた時の反応	目を合わせ、「ウー」と声を出す。	特に反応はしないが、目は合う。	自分の名前を呼ぶと顔を向け、兄の名前を呼ぶと反応しないので、自分の名前がわかっているよう。	目を合わせ、「うん」と返事をする。手足をバタバタさせる時もある。
言語理解			握ってなめたり、反対の手でさわって音を出したり、興味深そうにじーっと見たりする。	首を横に振って、「嫌だ」という意志表示をする。「ありがとう」と言う時、ペコッと頭を下げる。

	N：女兒	K：男児	S：男児	A：男児
物への反応 (おもちゃを渡す)	反応しない。	まだ握れず、興味もないよう。	四つん這いの姿勢で少しずつ動くのと、何度か寝返りをしての2通りの方法で移動できるようになった。	つかんでなめる。
動作、行動など			散歩や移動時はベビーカー。自転車の時は、おんぶひも。	始めて会った人には目をそらし、ソッポをむく。父親には目を合わせようとしなない。食べ物や飲み物などを見ると、ハーハーと興奮して身を乗り出す。
子どものことで最近気が付いたこと、気にしていることや変化、その他	2～3日前、父親に抱っこされて大泣きしてしまった。首がすわったので、おんぶができるようになった。	頻繁に顔を真っ赤にして苦しそうにいきむ。(調査中には見られず)手を握って、口の中に入れようとする。買物の時などの移動手段は車。		母親が近づくと、両手を伸ばして身体を動かして抱っこをせがむようになった。おしゃぶりを見つけると、自分で口の中に入れるようになった。散歩や移動時は抱っこひも。

このように、子どものまだ鼻音的要素の大きいクーイングに対し大人が言語音で応答してやるという「会話」を繰り返すことによって、子供は次第に言語音を習得していくと言われている(正高 2001)。正高はさらに、先天的に耳の聞こえない子どもにはクーイングや過渡期の喃語は健聴児と同様に見られるものの、より言語音に近い「規準喃語」(子音+母音の複数の音節からなるもの)を産出するようにはならないことを通して、子どもは他者が言語音を発するのを聞いてその感化を受け、次第に発声を変化させていくとしている。

母親の声や何回も聞いている歌に対しては反応し、調査員の声には反応しないことから、音声を選択的に聞けるようになってきていることが分かる。また視野内での手をたたく音やおもちゃの音に対しても注意を向けるが、後方からではいずれの音に対しても反応しない。

3. Kについて

生後11週で、調査開始時点ではNと同じ月齢であるが、約1ヶ月の早産であったためか、身体も小さく、全体的に少し発達が遅いようである。

泣き声は空腹の時に激しく泣く以外はまだ分化していない。

笑い方に関しては、笑顔だけのことが多い。「ハハハ」と笑うこともあるが、人や何かに反応するというわけではなく、反射的な行動のようである。

発声は「クー」などのクーイングと母音のみの2音節のものが見られるが、まだ“vocal play”は見られない。

音に対しては視野内外に関わらず、反応しなかった。母親の声もまだ聞き分けていないようである。一方、ほぼ毎日聞いているベッドメリーに対しては手足をバタバタさせて喜ぶ。ただし、これは視覚的な刺激も伴っており、どちらに対しより興味を示しているのかは判断できない。

4. Sについて

生後3ヶ月で寝返りができ、5ヶ月の調査開始時点で「ずり這い」のような動きをしているので、現在までのところ身体的な発達は早いと言えよう。

泣き声はかなり分化してきている。状況的な手掛かりも参考にはするであろうが、母親は子どものさまざまな訴えを泣き声を通して把握できている。泣き声が音声的信号として機能しているようである。

笑い声、笑い方に関しては、5ヶ月の時点で頻度が多くなったようである。特に人とのコミュニケーション場面で笑顔を見せたり声を出して笑ったりすることが多い。

発声は単純母音のみの「過渡期の喃語」の状態であり、まだ規準喃語は見られない。

音や声へは視野外からのものにもかなりよく反応する。初対面の調査員の後方からの声に対しても、注意を向けている。

母親との間ではリラックスした状況の中で、“vocal play”が行われているようである。他人とのコミュニケーションの楽しい経験が記憶され、未知の人に話し掛けられる場合も非常に嬉しそうである。人に対しても物に対しても好奇心が育っているようだ。

また母親がSの名前を呼ぶと顔を向け、兄の名前を呼んでも反応しないことから、自分の名前を選択的に聞き取ることができていると考えられる。

5. Aについて

まず身体面では、現在までのところ、標準的な発達を遂げていると言えよう。7ヶ月現在、支えなしでお座りができるようになり、また「ずり這い」ではあるが自分で動けるようになった。

泣き方に関しては、頻度は少なくなってきたようである。上記のような身体的発達により、視界が広くなり、いろいろなものが見られるようになったことと、自分の見たいものや触りたいものの所に自力で到達できるようになったことが大きな要因と考えられる。泣き声ははっきりと分化しており、母親は「眠い」、「空腹」、「怖い」などを泣き方で判断できる。

笑い声、笑い方に関しては、5ヶ月くらいから「キャハハハ」と声を出して笑うようになり、特に家族があやすとよく笑うようである。

発声は、単純母音のみからなる喃語だけでなく、子音+母音の複数音節からなる「規準喃語」が出ている。また、息を吐きながら唇を震わせて「プー」という音を出し、つばを飛ばすという行為をし

ている。これは多くの子どもに見られ、歯が生えることと関係しているという説もあるが、はっきりとは分かっていない。

音や声へは視野内外に関わらず、顔を向けて注意をし、母親が名前を呼んだ時のみ「うん」と言語的表現で応答している。また、母親が歌を歌うと聞き入っている様子で、兄が歌うと喜ぶというように、反応が異なるところが興味深い。テレビに対しては、女性が笑っている場面を見て笑うが、これは応答とも共感ともとれる。共感に関しては、かなり早い時期から始まるという指摘もあり、現在実験的な研究を検討している。

言語的音声はまだ応答の「うん」のみであるが、首を横に振ったり、「ギャー」と大声を出したりして「嫌だ」という意志表示をする。また、調査員が「ありがとう」と言ったら、ぺこっと頭を下げる動作をした。身振りによる応答の一つであり、コミュニケーションが徐々に模倣により学習した、意味のわかる音声や行動で行われるようになってきている。

また最近、初めての人に対しては目をそらしソッポを向くようになり、人見知りの始まりと思われる。

まとめと今後の課題

以上のように、4人の健常の0才児を対象とし、発声や言語理解、音声への反応、身振りなどを中心に、発達の過程の調査を開始した。被験児は男児3名、女児1名で、調査開始時点の生後週数はそれぞれ11週2名、22週、34週であった。4人とも首都圏の核家族の中で育てており、主に母親が家庭で養育に当たっている。どの母親も子どもに対して積極的に声をかけたり働きかけをしたりしている。男児一名が早産であり、また個人差はあるものの、総じて健康状態も良く、順調に発育しているようである。そして月齢の一番高い男児が、母親が自分の名前を呼ぶと「うん」と言って応答する以外は言語的発声はまだ無く、クーイングと喃語のみである。

以上のように、ごく平均的な環境で育てている子どもたちが、今後どのようにことばを理解し、産出するようになるのだろうか。今回の調査は予備的なものであり、より有効なデータを得るため、数回の調査を経た後、調査方法や記録用紙を改定していく必要がある。

まず今回作成した各々の記録用紙は満1才くらいまでの子どもを対象としているので、被験児たちの成長に伴い相応の項目を加える必要がある。特に単語や文の理解および産出に関して、現行のものは自由記述のみになっているが、言語理解に関する具体的な項目や単語のリストを作成し追加する予定である。その際には単語カードを作成し、提示することを検討している。またより客観的なデータを得るために、共感や音声に対する注意などに関する実験的研究も行う予定である。

そして本研究と関連して、初期の言語獲得に関する質問紙調査を行い、障害児も含む量的なデータを得ているので(田中他, 2001), その分析結果もふまえ、調査をより洗練されたものにしていく。

さらに質問紙調査と個別の家庭訪問調査を継続・発展させ、データを収集・分析して、年少児向けの初期の言語発達テストを作成することを最終的な課題としている。

ことばの発達に関する問題は、乳幼児健診や育児相談などで多数出てくるが、そのような場面です

ぐに用いて、初期の言語発達、特に言語遅滞の早期診断に有効なテストが無いのが現状である。従来の語彙テストは対象が3才以上であったり、発語中心であったりという偏りがある。年少の子どもにも対応できるようなテストは、ことばの遅れの早期発見や療養の開始、親の不安解消にも役立つことができる。このような点で、テスト開発は非常に有効で意義のある課題と思われる。

引用・参考文献

- Bates, E., Marchman, V., Thal, D., Fenson, L., Dale, P., Reznick, J. S., Reilly, J. & Hartung, J. (1994). Developmental and stylistic variation in the composition of early vocabulary. *Journal of Child Language*, **21**, 85-123.
- Caudill, W. & Weinstein, H. (1969). Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, **32**, 12-43.
- Hayes, Keith, J. (1950). Vocalization and speech in chimpanzees. *American psychologist*, **5**, 275-276.
- 藤永保. (1990). *幼児教育を考える*. 東京：岩波新書.
- 藤永保. (2001). *ことばはどこで育つか*. 東京：大修館書店.
- 秦野悦子(編). (2001). *ことばの発達入門*. 東京：大修館書店.
- 生澤雅夫他. (1985). *新版K式発達検査法*. 京都：ナカニシヤ出版.
- 小林晴美・佐々木正人(編). (1997). *子どもたちの言語獲得*. 東京：大修館書店.
- 正高信男. (2001). *子どもはことばをからだで覚える：メロディから意味の世界へ*. 東京：中公新書.
- 森岡健二・藤永保. *言語と人間*. (1970). 東京：東海大学出版会.
- 中島誠・河野通夫・萩尾藤江. (1996). 子どもはことばをどう育てるか. 中島誠(編), *子どもは認知やことばをどう育てるか：健常児・障害児に共通な発達機制* (pp.2-10). 東京：培風館.
- 荻野美佐子・小林晴美. (1999). 語彙獲得の初期発達. 桐谷滋(編), *ことばの獲得* (pp.71-116). 京都：ミネルヴァ書房.
- 小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬俊樹. (1998). 初期言語発達インベントリーの妥当性及び語彙チェックリストの検討. *神戸大学発達科学部研究紀要*, **5**, 261-276.
- 上田礼子・Frankenburg, W. K. (1983). *日本版デンバー式発達スクリーニング検査：JDDSTとJPDQ増補版*. 東京：医歯薬出版株式会社.

<謝 辞>

本研究の実施にあたり、ご協力頂きました母子の皆様、ならびに調査およびビデオ撮影を分担して頂きました福田佳寿子さん、石井陽子さんに厚く御礼申し上げます。

記録用紙（母親記入用）

名前 _____ 年齢 _____ 歳 _____ ヶ月 _____ 日（ _____ 週）
 _____ 月 _____ 日（ _____ ） ~ _____ 月 _____ 日（ _____ ）

1. 前言語的音声について（いくつでもご記入ください）

「クー、アー」など、1音節のもの

「アーアー」など、2音節だが、単純母音からなるもの

「パパバ、ダダ」など、複数の音節からなり、各音節が子音+母音で構成されているもの

単語（どのような状況で何と言ったか）

2. 息を吐きながら唇を震わせて「プ～」という音を出し、ツバをとばしたりすることがありますか。

あり ない

* 歯がはえてきましたか 現在 _____ 本

3. お子さんは今どのような笑い方をしていますか。

- 声を出さないうで笑顔だけ
 つかすかに声を出して（息が漏れるような声で）笑う
 声を出して笑う
 どんな笑い声ですか _____
 その他： _____

4. お子さんはどんな歌（童謡など）に興味を示し、その時どんな反応をしますか。興味を示した曲名と反応（次の中からあてはまる番号）をお書きください。

<反応例>

- 泣き止む 音の方に目や頭を向ける 手足をバタバタさせて喜ぶ 声を出す
 音楽に合わせて体を動かす 手をたたく 泣く その他（ _____ ）
 （ _____ ） その他の場合は、具体的にお書きください

曲名 _____ 反応 _____
 曲名 _____ 反応 _____
 曲名 _____ 反応 _____

5. お子さんがテレビ（ビデオ）に興味を示し、じっと見ていることがありますか。興味を示した番組名とその時の反応（4の反応例の番号）をお書きください。

番組名 _____ 反応 _____
 番組名 _____ 反応 _____
 番組名 _____ 反応 _____

6. 話し掛けたときのお子さんの反応（あてはまるものに）

- 目が合う 手や足をバタバタさせる 声を出す
 その他： _____

7. 言葉理解について

子どもは言葉発するよりも前に、耳で聞いた言葉について理解したり、自分の言いたいことを身振りで伝えようとしたりします。次に挙げるような行動がみられた場合は（ _____ ）をつけてください。

自分の名前を呼ばれると反応する。

 どんな反応ですか。 _____

「まんま」や「おっぱい」という言葉に反応する。

 どんな反応ですか。 _____

「バイバイ」と言うと手を振る。

指差しをする。

 どのような状況で何を指差ししましたか。 _____

首を横に振って「嫌だ」という意思表示をする。

「ありがとう」や「どうも」という言葉に合わせて頭をベコッと下げる。

電話の受話器（おもちゃ）などを持って何か話す真似をする。

 どんな様子ですか。 _____

家族の持ち物が区別できる。

オウムテンテンができる。

「ティッシュ取って来て」、「ゴミ箱にポイして」など簡単な用事ができる。

* ここに挙げたもの以外に、言葉では言えないが動作を見ているとものごとの名前や内容がよくわかっていたりと思われることがありましたら、いくつでもお書きください。

資料 2

チェックリスト

名前 _____

生年月日 平成 ____年 ____月 ____日

8. この一週間で、お子さんが初めてできるようになったことなど、気づいたことがありましたら何でも自由にお書きください。

	首がすわる	歳	ヶ月
	寝返り	歳	ヶ月
	お座り	歳	ヶ月
	ハイハイ	歳	ヶ月
	ずりばい	歳	ヶ月
	高ばい	歳	ヶ月
	つかまり立ち	歳	ヶ月
	歩き始め	歳	ヶ月
	歯がはえる	歳	ヶ月
	ストローが使える	歳	ヶ月
	「ブ～」と言ってツバを飛ばす	歳	ヶ月
	声を出して笑う	歳	ヶ月
	自分の名前に反応	歳	ヶ月
	ハンドリカード(自分の手をじつと見る)	歳	ヶ月
	「まんま」や「おっばい」に反応	歳	ヶ月
	「バイバイ」と言うと手を振る	歳	ヶ月
	指差し	歳	ヶ月
	“嫌だ”という意思表示	歳	ヶ月
	簡単な用事	歳	ヶ月
	「ありがとう」などのしぐさ	歳	ヶ月
	家族の持ち物の区別	歳	ヶ月
	オツムテンテン	歳	ヶ月

< できたら、 をつけて、時期を記入 >

基本調査（調査員用）

名前 _____ 生年月日 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日
 記録日時 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日 (____ : ____ ~ ____ : ____) 記録者 _____

1. 家族について

家族構成

父 (____ 歳) ・ 母 (____ 歳) ・ 兄 (____ 歳) ・ 姉 (____ 歳)

その他 :

家族の話すことばについて (方言の有無などの特徴)

子どもは昼間主に誰とどこで過ごしているか。(祖父母がいる場合、どの程度育児にかかわっているかを記入)

2. 生育環境について

住居 (一戸建てか集合住宅か、何階か、広さ、庭の有無など)

家の中の様子(子どもが遊ばまわるのに適しているか、つかまり立ちに向いているかなど)

育児の方針(どんな子に育てほしいか、特に力を入れていることがあるかなど)

父親の育児参加について

記録用紙（調査員用）

名前 _____ 年齢 ____ 歳 ____ ヶ月 (____ 週)
 記録日時 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日 (____ : ____ ~ ____ : ____) 記録者 _____

1. 育児のスケジュール(起床から就寝までの流れを記入、安定しているか否かなど)

2. 習い事(スイミングなど)

3. 親の言語刺激の与え方(話しかけの頻度や、子どもとのやりとりのパターンなど)

- () 子どもが静かにしていても話し掛ける
 () 子どもが何か反応したとき(寝返りなど)話し掛ける
 () 子どもが何かしても無反応
 () その他 :

4. 子どもの中で最近気づいたこと・気にしていることなどは何か。(夜泣き、かんしゃく、よく笑う、表情の変化、人見知りなど)

5. 泣き声の種類・分化(泣き方で子どもの状況がわかるか、など記入)

6. 笑い声、笑い方の変化(母親記入の記録用紙を見ながら確認)

7. 体の動きの変化（母親記入の記録用紙を見ながら確認、移動・身振りなど）

8. 育児の方針（最初の答えと同じか、変化しているか）

9. 父親の育児参加について（最初の答えと同じか、変化しているか）

～ ～

1. 音への反応（音の種類と反応）

* ガラガラ音

顔の前

見えないところ

* 手をたたく

顔の前

見えないところ

* その他：

2. 声への反応

* 母の声

見えるところ

見えないところ

* 調査員の声

見えるところ

見えないところ

3. 物への反応（調査員が落したおもちゃに対する反応）

4. 話し掛けると目が合うか。（母親記入の記録用紙を見ながら確認）

5. 調査時間内の子どもの発声

「クー、クー」「アー」など、1音節のもの

「ア-ア-」など、2音節だが、単純母音からなるもの

「ババババ」、「ダダ」など、複数の音節からなり、各音節が子音+母音で構成されているもの

単語（どのような状況で何と言ったか）

6. なじみのある単語への反応（選択的に聞くか）

* 「ちゃん」、「ママ」、「ワンワン」など、なじみのある言葉を母親に聞いておき、それらの言葉を言ったときの表情の変化や、発声の有無等を記録する。（観察でもよい）

7. この1ヶ月で変化したことなど（子どもの特徴など気が付いたことを何でも記入）

